

沖永良部島の戦争の歴史

著者	川上 忠志
雑誌名	奄美ニューズレター
巻	32
ページ	17-22
別言語のタイトル	The posy-war history of Okinoerabu
URL	http://hdl.handle.net/10232/17877

■しまゆむた

沖永良部島の戦争の歴史

川上 忠志（南日本新聞和泊販売所所長）

1. 琉球第32軍・沖永良部守備隊進駐と防衛体制

戦後60年も過ぎると過去の戦争の記憶が薄れてゆく、私たちは歴史的視点で戦争を検証し平和な世の中を後世に伝えなければならない。

(1) 日中戦争から太平洋戦争へ

日本は他国の領土に侵攻し、1931年(昭和6年)の満州事変をきっかけに1937年(昭和12年)支那事変(日中戦争)を始めた。日本は常時、約100万人の軍隊で中国を攻撃していたが降伏させることはできなかった。日中戦争のいきずまりは物心両面で中国を援助するアメリカやイギリスのせいだと、米英憎しの気運の高まりとなり対立を深めていった。ついにアメリカによる石油の輸出停止や経済制裁に発展していった。

日本は中国から撤退しアメリカと妥協して貿易を復活させるか。このまま日中戦争を続け米英との戦争に突入するかの瀬戸際になったが軍国主義の高まりを抑えることはできず日本は後者を選び、石油のある蘭印(オランダ領東インド現在のインドネシア)や米英が持っている東南アジアの植民地をごっそりいただくとした南方進攻作戦を進めた。1941年(昭和16年)12月8日、米国ハワイの真珠湾奇襲攻撃とマレー半島への侵攻によって米英蘭などの連合国との太平洋戦争が始まった。一方、ヨーロッパでは米英はナチス・ドイツやイタリアとの戦争を続けていたので第2次世界大戦の戦線はヨーロッパからアジア全域に広がった。

(2) 沖永良部守備隊の進駐の時代背景

日本軍は最初快進撃をし、東南アジアから太平洋上の島々も占領した。しかし開戦半年余後の1942年(昭和17年)6月、ミッドウェー海戦に出撃した航空母艦4隻をすべて失って大敗、制空権を失った。また、ガダルカナル島や東部ニューギニアで米軍に敗退したのをきっかけに日本軍は守勢に変わり太平洋の島々や中国大陸でも暗雲がただようようになった。

日本軍は米軍の豊富な物量と怒涛のような反撃に南方の島々で玉砕し敗退していった。このような中で兵員不足を補うため昭和18年暮れ学徒出陣が開始された。戦時教育を受けた青少年たちは戦場へ志願した。「島からも赤紙で出征兵士が戦地に送り出された。又、あどけない青少年たちが今の集団就職のようにわれもわれもと志願兵として戦場に向かった、親の印鑑を勝手に押す者もいた(豊枝武敏和泊町役場兵事係)。11月5日、知名町小米沖に突然、潜水艦が現れ知名の市街地を砲撃、死傷者を出した。(戦後、ある志願兵は語った。あの国民学校の先生が「君たちは、お国のため、天皇陛下のため命をすてて戦わねばならない」との教育さえなければ志願して戦場で苦しい戦いをしなくてもよかった。今は手のひらを返して平和教育をしている)。私は戦後の平和教育を受けた身では信じられない気持ちでした。

開戦以前から奄美大島の軍備強化を図ってきた日本軍は瀬戸内方面に要塞陣地を構築、海軍も大島防衛隊本部を設置した。開戦と同時に徳之島浅間(現空港近く)に飛行場

造成工事が着工した。沖永良部からも作業員が徴用され交代で徳之島に通った。私の父親、清忠は縁側で昼寝をしていた時、船乗りの長男清が白い制服姿で枕元に立った。輸送船は軍に徴用、清は千島列島で戦死した。悲嘆にくれながら昭和19年徳之島に通い、浅間の飛行場建設をした。

南方戦線悪化の中で南西諸島の重要性が高まり1944年(昭和19年)3月沖繩守備軍の第32軍(司令官渡辺正夫中将8月病氣離任、後任牛島満中将、参謀長に長勇少将)が新設された。沖繩本島に南、東、中飛行場のほか離島にも飛行場が建設され、各飛行場の労務者は沖繩の住民老若男女問わず連日数千人が徴用され突貫工事で進められた。

5月、奄美守備隊として琉球第32軍独立混成第64旅団(旅団長高田貞定少将)が編成され徳之島の大和城山を中心に展開してきた。奄美の島々でもこの頃から米軍機による空襲がひんぱんになった。一方、ヨーロッパでは連合軍がノルマンディーに上陸作戦を開始。また、南方戦線への輸送路を断たれた日本軍は将兵や物資が敵の潜水艦によってこの南西諸島周辺でも波間に消えた。孤立無援の南方戦線では米軍がサイパン島に上陸、死闘が展開されていた。

(3) 沖永良部島の防衛体制

昭和19年6月12日、沖永良部守備隊(隊長吉岡勝少佐、神奈川県大和市出身)は奄美守備隊から、その中の第21連隊の第3大隊の第7中隊、第8中隊が派遣され、続いて第9中隊なども到着、現地招集兵約150名なども含めて約800名の兵士が配置されて沖永良部守備隊の陣容が整った。(越山600人、大山200人)また在郷軍人や島民で組織する防衛隊なども加わり沖永良部島の防衛体制は強化されていった。(初代守備隊長吉岡勝20年1月戦死。2代隊長久木留国夫大尉20年5月病死。3代隊長藤田彦治大尉が終戦まで勤める)ま

た、与論島警備には沖永良部守備隊の中から小野少尉(山口県出身)率いる44人が着任。与論島の在郷軍人などの防衛隊(隊長山市郎軍曹)や金井清実村長以下役場職員はじめ島民すべてが日本軍の指揮下に統一され、九十七高地一帯の台地に島民が総動員されて陣地構築に汗を流した。

沖永良部守備隊(陸軍)は初め和泊に、その後各学校などに陣をかまえていたが次第に和泊町の越山を中心に展開し、知名町の大山にその中の平中隊の松延少尉率いる約200名が布陣された。また海軍も山口政秀少尉(鹿児島市出身)率いる電波探知機班約10人が大山頂上付近に見張り所を設置周辺海域を見張った。日本軍は米軍上陸を想定、水際作戦をしても勝ち目無しと判断。越山と大山を要塞化しようと洞窟陣地を構築することを計画した。防衛隊員や小学生高学年の生徒から戦地に行けない婦人や高齢者などの住民を総動員して戦車壕や攻撃用トンネル、機関銃陣地、野砲陣地、蛸壺、退避洞窟等々を東西南北に構築していった。

(4) 米軍アイスバーグ作戦と集団自決壕

米軍は南方戦線の島々で日本軍を玉砕に追い込み勝利し次第に北上すると、この沖永良部島でも空襲がひんぱんになってくる。住民たちは働き手は軍隊に取られて不足する中で農作業や各家庭にも防空壕掘に夢中だった。当時の防空壕には3種類ある。

- 1、第一避難壕 各家庭に掘った防空壕。
- 2、第二避難壕 集落内や田畑近くに、鍾乳洞などを利用した集落ごとの避難場所。
- 3、第三避難壕 軍隊の目の届く場所、集落から遠く離れた越山、大山周辺に掘った。



沖永良部島戦争遺跡（戦車壕）

私が第三避難壕を発見したのは1999年(平成11年)頃、当初単なる防空壕だと思っていた、しかし調査を進めるうちに当時の小学生たちが先生や上級生に連れられて越山に来て「敵軍が上陸した、その時、には君たちの死に場所はここだよ」と教えられたことが分かった。(証言者、太光栄氏、大福謙蔵氏)私が子どもの頃は家や畑の回りにまだ防空壕は無数に残っていていい遊び場所だった。(私は戦争中、敵機の機銃掃射に合った。ヨチヨチ歩きながら家の周りの防空壕に一瞬早く逃げ込み無事だった。爆弾の音と白い煙、母はあの子はもうだめかと思ったと言う)。それでなぜ?・・・集落より遠く離れた越山に集団的に無数に掘る必要があるのか?・・・との疑問があった。もしかしたら沖縄戦で聞く集団自決壕ではないかと思うようになった。また、奄美群島の島々にも集団自決壕は掘られてあると聞き、もしかしたら沖永良部島にもと思い、精力的に聞き取り調査を始めた。

幸い戦争が早く終わり、沖永良部島に米軍は上陸せず沖縄のような悲劇は起こらなかった。また、これを使用することも無く現在まで忘れ去られていた。この第三避難壕(非常用防空壕、当時は「その時の」又は「最後の死に場所」とか言った)を掘ったのは軍隊に行けない老人や子供、銃後を守っ

ている婦人たちであった。(壕掘り証言者、朝戸貞造氏、宮原ミノさん、田中マメさん、溜田ナツさん、宮原茂光氏、山下実氏、他多数)つまり米軍上陸の際、日本軍の足手まといになり邪魔な人たちが自分たちの死に場所を掘っていたと言うことです。(大山は:現在の自衛隊基地の東側一帯、ここも日本軍の目の届く所)

赤々と燃える南西の空、轟く砲声の音、戦場となった沖縄の空はこの沖永良部島からも見て聞こえたと言う。2001年4月2日の南海日日新聞には米軍の沖縄上陸作戦「アイスバーグ(冰山)作戦」で喜界島とともに沖永良部島上陸も計画されていたと報じられている。その計画では、米軍は沖縄攻略の後、圧倒的な装備で沖永良部島の北海岸の伊延と国頭の北海岸から上陸、越山や大山を攻撃する。和泊の南西海岸沿い(現在のAコープ付近か)と国頭のどちらかに飛行場建設も予定し、宮崎から日本本土への上陸を計画していた。

沖永良部守備隊はこのアイスバーグ作戦を予見したかのように島の各地に迎撃作戦準備を展開していた。越山を要塞化し地下壕を張り巡らせ、周辺に戦車壕を作り敵戦車の侵入防止を。また国頭岬の頂上や砂葉海岸上の鶴の窟、長浜海岸、金比羅神社西方、瀬名内喜名海岸、半崎海岸、田皆岬、屋子母、住吉、知名、瀬利覚、古里、根折、和集落など島周辺数十箇所に見張り所や要塞陣地を構築して米軍の上陸に備え弾を撃つことも無く息を潜めていた。

島民で組織する防衛隊や住民は軍の指導で学校の鉄棒などを利用して鍛冶屋で槍先を作り、竹で竹槍を作り「エイ、ヤー」と軍事訓練に励んでいた。国頭字誌には「昭和19年から沖永良部守備隊が島の守りについていて敵を撃退するだけの装備はされていなかった。越山に陣地を構築し、住民の協力で避難壕を掘った。敵が上陸した時

には全島民が越山と大山に終結して玉砕する覚悟であった」と書かれている。沖永良部守備隊の末松則雄衛生兵(大分市在住)は「越山の兵は弾を一発も撃たなかった、敵の上陸を待つだけだった。兵士達は終戦を知らなかった、知ったのは8月15日から10日ほど過ぎてからだった。」と語った。

(5) 特攻兵の交差点沖永良部島

1945年(昭和20年)米軍は大型空母16隻や軽空母10隻、護衛空母50隻余、戦艦20隻など大空母機動部隊に海兵隊など50万人余の地上部隊を有し、日本に向けて侵攻を開始。1月米軍艦載機約900機が奄美群島や沖縄群島を攻撃。4月、ついに沖縄に上陸した。最悪な戦局を迎えた日本軍は劣勢を挽回する方策としてフィリピンのレイテ湾作戦以来敢行していた特別攻撃隊を強化。いわゆる航空機や船舶による体当たり自爆攻撃「神風特別攻撃」である。

20年5月、徳之島、「海の業に経験のある者は手を上げろ」エラブや与論の若者は経験豊富。暁部隊の総勢は60人ほど、隊員皆漁師に変身、夜闇にまぎれて山港をクリ船で出港、目指すは沖縄、一艘に6人乗り込んだ。激戦の沖縄に弾薬や武器の輸送に行く決死隊は朝、和泊の南洲橋下に着いた。与論に2泊、沖縄を目指した。(与論町誌)。南洲橋下で休憩しているクリ船の友人に「おい、みなみ、どこに行くのだ・・・」「沖縄だ、これは秘密だよ・・・」これが戦死した玉城字出身の南利隆兵長を見た最後だった(手々知名字早川昇氏談)。

沖縄戦が開始されると連日、知覧基地(陸軍)や鹿屋基地(海軍)から特攻機が飛来するようになった。日本の特攻機の沖縄到着を阻止せんと米軍の戦闘機が奄美群島周辺上空で待ち構えている。6月3日、知覧を飛び立った当山幸一少尉は敵機に追われながらエンジン不調で喜美留集落の畑に墜落した。

和泊港沖合いで空中戦の末、友軍機2機は撃墜され安斎岩男海軍中尉は和集落の畑に墜落した。(目撃者、大福静枝さん、大福謙蔵氏、他多数)伊延港東沖でも空中戦の末撃墜された特攻兵は東京出身だった(松田純矩氏、池田富昭氏目撃)。グラマンに追われて内喜名海岸沖に墜落した友軍機の兵士達をクリ船を漕いで助けたのは市来武義内城地区防衛部長たちだった。救助者5人のうち機長は戦死、十七歳の少年兵は太股を射貫かれ「痛い痛い」と叫びながら息絶えた。その他にも沖永良部島には手々知名の長浜や西原(池下龍邦氏証言)、屋子母海岸(上宮少尉)、田皆等々多くの特攻機が不時着や墜落をした。また海上で敵機との空中戦で撃ち落される日本軍機を多くの島民が目撃していた(児玉富埜氏、西田安村氏他多数証言)。特攻兵の寺山大尉が沖縄から生き残り部下数人を連れて我那覇金龍と言う青年のクリ船で北上中、和集落の大里アキさん宅に泊まった。その後、寺山大尉の指揮下に入った当山少尉や特攻生き残り兵たちは徳之島から奄美を経て本土へ帰還した。沖永良部島は沖縄から生き残って本土に北上する特攻兵や沖縄に特攻に行く兵士達、途中不時着する特攻機など特攻兵たちの交差する島でもあった。越山の部隊では生き残り特攻兵は多少粗末な扱いを受けていたと言う(現地召集された福永忠一氏、国村政志氏他多数証言)。

2. 戦跡と慰霊碑から・・・語り継ぐ戦争の歴史へ

戦後60数年も経つとかつての戦争の記憶が薄れるように戦跡もまた朽ち果てた。島の戦跡は保存されることもなく荒れるがまま。それでもわずかながら残っている。

(1) 戦跡

越山周辺に戦車壕、防空壕、退避壕、蛸

壺等があり、東西南北に走っていたトンネルは没落して跡形も無い。集団自決壕は埋め立てられ沖永良部グリーンセンターや南西コンクリート会社になり周辺に少し残る。大山の海軍見張り所は自衛隊のヘリコプター発着場になった。

(2) 集団自決壕はなぜ、どう掘られたのか

越山の県道下の沢に集団自決壕は無数に掘られていた。沖縄の次はこの島に米軍が上陸するだろうとの思いから住民は掘ったのか。住民が勝手にすることは出来ない時代、軍の命令で行政が住民に割り当てて作業をしたものと思われる。当時の軍部や行政の上層部もいなくなった今となっては確かめるすべは無い。しかし壕を掘った人たちは米軍が上陸した最終局面では「ここでおそらく死ぬだろう」と思っていた。なぜなら当時は「捕虜になる」と言うことは教育されていなかったからだ。天皇陛下のため、自ら死ぬことが美德であると教えこまれた(証言、大福謙蔵氏、朝戸貞造氏、宮原ミノさん、田中マメさん他多数)彼らは、もし米軍が上陸したならば沖縄の悲劇がここでも起きただろうと予測できる。

最近、長寿会や郷土研究会とかにアンケートに協力してもらった。50人中約半数近くの方が越山や大山で自決壕や戦車壕掘りを経験している。また、多くの方々が米軍上陸時に自決用にと答え、軍が役場に命令、各集落に割り当てたと答えている。

(3) 慰霊碑及び忠魂碑、奉安殿

太平洋戦争での出征軍人や軍属等の戦死者は和泊町で663人、知名町で487人、合計1150人である。和泊町は越山頂上に知名町は大山自然休養村センターにそれぞれ慰霊碑が建立されている。民間人の犠牲者も多く、和泊町喜美留の海岸近くに民間人犠牲者の慰霊碑が建立されている。戦前戦後建

立された「招魂社や忠魂碑等」は手々知名字や国頭、永嶺、玉城、和、畦布、知名、久志検、上平川字の各集落に残っている。また、皇国思想の象徴でもあった「奉安殿」が内城小学校庭に島内に唯一残る。奉安殿は戦前は各学校にあり、天皇陛下の遺影と教育勅語が収められていた。天皇陛下の遺影を見たら目がつぶれると言われ、だれも頭を上げて見たことが無いらしい。(手々知名字の招魂社が最も古く日露戦争時の明治38年建立)



沖永良部島戦争慰霊碑 (越山頂上)

(4) 語り継ぐ戦争の歴史

戦争の世紀と呼ばれた20世紀、戦争を語り継ぐことは時には残酷であり、忘れようとした悲しみを掘り起こさせることもあるだろう。風化する戦争の記憶を次世代に伝えていかなければならない。日本はいったい誰がこの愚かな戦争を始めたのか、そしてどう責任を取っていったのか。あの昭和16年、戦争を回避することは出来なかったのだろうか?

今、新たに人類は核の脅威にさらされている。悲惨な核戦争を経験した日本はもっと世界に核戦争の無謀さを声高らかに叫ばなければならないと思う。そして戦争を知らない若者にこそ戦争は破滅をもたらすだけであることを強く教えていかなければならないと思う。

人類は悲惨な戦争を幾多となく経験しているのにどこかで今も戦いは続いている。日本では戦後半世紀をすぎた。戦争で出征経験者も少なくなり、沖縄では集団自決に日本軍の命令は無かったとの教科書問題が議論されている。又、従軍慰安婦も軍の関与は無かったと・・・

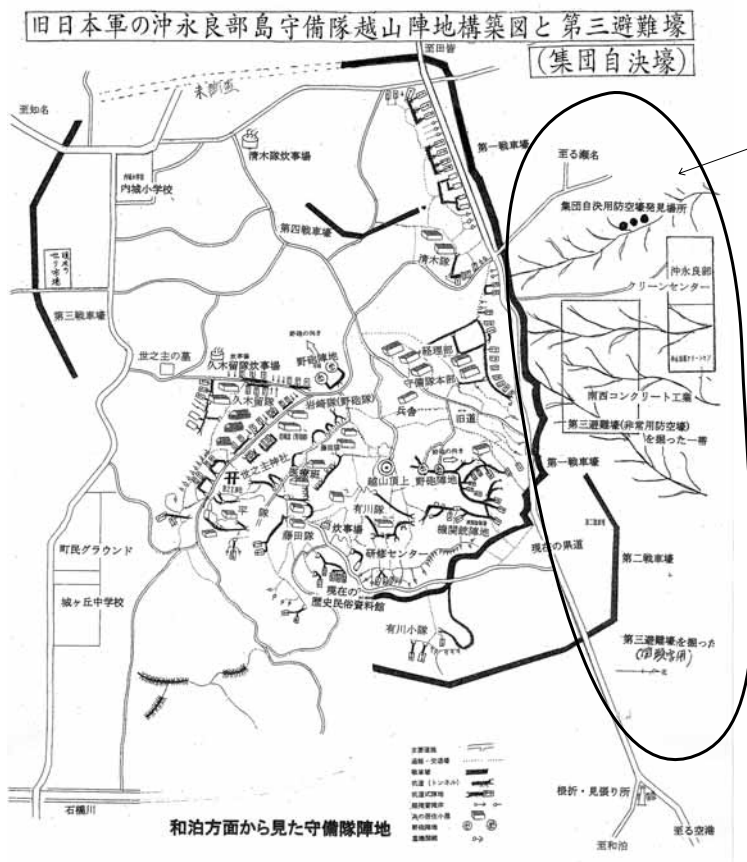
この沖永良部島の越山の陣地構築を見て貴方はどう思いますか？ ある人は「城壁を巡らした城だ」と言う。しかし海外の城は敵が攻撃した時は住民を中に入れるが、ここでは邪魔だから自決せよと言う日本的な

発想である。この陣地構築を見て、日本軍の関与が無いと言い切れますか？ 町の町長以下学校も住民もすべて軍の指揮下に入る時代だったからだ。

その内、戦後100年も経てば「日本は侵略はしなかった」とか「戦争は無かった」と言う時代がくるかも知れない。そして再び戦う時が・・・そして苦しむのは名も無き庶民です。

参考文献

和泊町誌。知名町誌。与論町誌。徳之島町誌。琉球沖縄史(沖縄県歴史教育研究会発行)。私と戦争(著者、当山幸一)。戦争体験記(和泊町発行)。えらぶせりよさ(沖永良部郷土研究会発行)。知名町青年学校日誌。末松則雄衛生兵手記。国頭字誌。



現在の県道の右下一帯が集団自決用避難壕であった。